

山本周五郎論

——人が生きるとは——

綾目広治

一

元号で言えば昭和初年より作家活動を始めていた山本周五郎は、当然ながらあの軍国主義の時代を体験したのであるが、その軍国主義に迎合するような小説を彼が残しているかという点、必ずしもそうとは言えないだろう。むしろ、当時の風潮に背くような内容の小説を書くことは不可能であったから、その小説で語られていることはやはり当時の支配的な言説に沿ったものとはなっている。

たとえば、『夜明けの辻』（『新国民』、一九四〇・一二・一九四一・五）は、実在の人物で江戸時代の兵学者であり且つ尊皇家であった山県大武を登場させ、山県の唱える尊皇思想に感化される青年たちが登場する物語である。その青年の一人である伊兵衛について、こう語られている。「幕府制度を固くするためにのみ、歪められてきた武士道、忠義を唱えながら、そのもつとも本質たる朝廷への精忠という意義を覆い隠してきた武家道徳、その正体が臃げながら

伊兵衛には分りはじめたのだ⁽¹⁾」と。この物語は、やがて幕末の討幕運動へと繋がっていくだろうと考えられるから、このように語られているのは、歴史的に見て自然なことと言えよう。ここで触れられている山県大武の言説も、戦前昭和の十年代に現れてくるファナティックなものではないと言える。

このように山本周五郎は、江戸期の国学に影響を受けた青年を登場させる小説を書くことによって、軍国主義時代のあの国粹主義的な言説統制の網の目に、うまく引っかからずにくぐり抜けたのである。物語の時代をより幕末に近づけたのが『新潮記』（『北海道新聞』、一九四三・四・二五・同一〇・二）である。主人公である、高松藩の藩士である早水秀之進は、自分が庶子であることからその心情は屈折していて、文武に秀でていたにも拘わらず時流を冷ややかに眺めるだけであった。しかし、やがて水戸藩に密使として赴いたことから、その地での感化もあって、秀之進は言わばノンポリティカルな姿勢を捨てて、尊皇の時流に積極

的に関与しようとし始めるのである。

秀之進によれば、武士道というものも「久米の子らの精神」であつて、「大伴らの氏かばねが皇統を護る精神」であり、「そこには禅や儒教などの影響は少しもありはしない」のである。「久米」は大伴氏の配下にあつた氏族であるが、このように武士道の精神も古代から直接繋がつたものと見るのである。なるほど、このような言説は当時の風潮に沿つたものであるが、興味深いのは、日本の神道の本質が擱まれていることである。秀之進は、神道には多くの宗教にある「独特な煩瑣^{はんさ}哲理」などなく、また神社は「我われの生活感情に溶け込んでゐる」のであるとして、それは「(略)理論なしで存在する神社というものがあり、それを受容れる超理論の信仰が先験的に我われのなかにあるからだ」と述べている。「超理論」というより、むしろ単に「無理論」と言うべきであるが、そう読み替へると、早水進のこの言葉はたしかに日本の神道の特質を踏まえた言説である。もつとも、ここで言われている「先験的」という言葉は不適切であつて、カント哲学の「先験的」という言葉が幕末に向かう時代に日本にあつたはずはないのである。

これらの言説は軍部や軍国主義に迎合したものと考ええる必要はないであろう。山本周五郎が早水進に語らせている内容は、国学が興隆していく時代に、その国学に影響を受けている、当時の知識人青年たちにとっては、ごく普通の

言説であつたと考えられるからだ。だから、山本周五郎が幕末期を小説の題材にして登場人物に天皇親政のことを語らせるのは、歴史時代小説としてむしろ当然のことであつて、戦後になつて山本周五郎は戦中期の自分自身について、軍部に迎合した小説を書いていたとして反省する必要はなかつたと言える。したがつて、山本周五郎が戦中期に書いた小説は、戦後においても何も変更する必要もなくそのまま読めると言つていいが、そのことは直木賞候補に挙げられながらも、その候補を辞退した小説『日本婦道期』(大日本雄弁会講談社、一九四三・八)についても言えることである。また、この小説集には、後の山本周五郎に見られるものの考え方の特質もすでに現れていると言える。

『日本婦道記』に収められた短編で語られている婦人たちは、どの婦人も健気で気丈で賢く、そして決して目立とうとはせず、且つ思いやりのある婦人たちばかりであると言える。たとえば最初の短編「松の花」では、佐野藤右衛門は妻の「やす女」が病死した後に、「自分がぶじに御奉公」できたのも、妻の力と支えがあつたからこそだ、ということを知るのである。妻の「やす女」は自分は質素にして、夫や家、そして周りの人たちを支えていたのである。藤右衛門はこう述べている。「烈女節婦」は褒められるべきだが、「しかし、世間にはもつとおおくの頌むべき婦人たちがいる、その人は誰にも知られず、それとかなちに遺ることもしな

いが、柱を支える土台石のように、いつも蔭にかくれて終ることのない努力に生涯をささげている」と。『日本婦道記』を貫く主張が、ここに端的に語られていると言える。

次の短編「梅咲きぬ」では、いろいろな習い事をして、すぐに上達するものの、またすぐにその習い事を辞めて次の習い事を始める姑について、それは飽きやすいからだと思われていたのだが、実はそうではないことをその姑自身が言うのである。すなわち、学問諸芸には習い覚えて「心の糧かてとすれば人を高め」るが、「けれどもその道の奥をきわめようとするようになると『妻の心』に隙ができません、(略)妻が身命をうちこむのは家をまもり良人に使えることだけです、そこから少しでも心をそらすことは、眼に見えずとも不貞をいなくことです」と。姑は、習い事の精を出すのではなく、良人や家を支える「土台石」であろうとすることに精を出すべきだと考えていたわけである。

後の山本周五郎の小説との関わりで見ておきたいのは、「糸車」という短編である。「お高」という娘は実家が貧しいので「依田」という家にもらわれていき、そこで育ったのであったが、その貧しかった実家も以前よりは裕福になったようなので、実家に帰る話を持ち上がる。「依田」の家も「お高」は当然実家に帰るものと思っていたが、しかし「お高」は育ててくれた「依田」の家を離れるわけにはいかなしい言うのである。「お高」は実家の母親に言う、

「(略)依田の父はもったいないくらいよい父でございます、弟もしん身によくなついていて母のようにたよっていて呉れます、わたくしにはあの家を忘れることはできません、いまになって父や弟と別れることはわたくしにはできません」と。

この小説には、生みの親よりも育ての親を大事にしたいという山本周五郎の思いが込められていると言えよう。あるいは、血の繋がりよりも、すなわち血縁が無くても、心と心が結びついた繋がりの方が大事である、という山本周五郎の考えが語られているとも言えよう。前者に関連することでは、よく知られていることだと思われるが、山本周五郎は小学校を出て山本質店に勤めることになる。当時の言葉で言えば、丁稚奉公である、しかしながら、山本質店は丁稚奉公という暗いイメージと違っていた。清水三十六とむという名前の少年が後に筆名として山本周五郎を名乗るようになる、その名の「山本周五郎」が店主であった。奥野健男の『山本周五郎』によれば、この人は「洒落齋と号する気骨のある趣味人で(略)向学心も強く、店員たち全員を独立してからも困らないようにと正則英語学校と大原簿記学校に通わせるような進歩的な店主だった」⁽²⁾ようである。「進歩的」であるとともに、やはり思いやりのある人だったと言えよう。この「山本周五郎」との出会いから、山本周五郎は生みの親よりも育ての親の大切さを体験した

と言え、そのことが「梅咲きぬ」の短編の背景にあると考えられる。

「菅笠」は、育ての親ではないが、やはり血縁はない姑を、母と思って生きていこうとする女性の物語である。婚約した二人の友だちと話しているときに、「妬み」からか「強がり」からか、自分にも婚約した男性がいると思わず言ってしまった「あきつ」は、実際にその男性の家の嫁になるのである。しかし、その男性は戦場に行っていて「あきつ」は男性と話をするこゝもないまま、男性は戦場で討ち死にしたのである。男性の母親は、自分の息子が乱暴者で結婚などできないと思っていたのだが、「あきつ」という女性が息子の嫁として来てくれることをたいそう喜んでくれ、「あきつ」のことも実子のように大切にしてくれた。その姑の思いに応えるように「あきつ」は、男性が死んでもその姑と生きていこうと思うのである。この物語にも、親子というものは血縁よりも心の繋がりによる関係が大切であるという主張が込められていると言えよう。

『日本婦道記』には、自分の女性としての幸福を省みず、亡き姉の息子を武士として立派に育てることに専心する女性を描いた「おもかげ」や、夫は私闘の責任を取って切腹し、その後残された妻が夫の子である男子を立派な武士に育てようと奮闘し、実際にその子は立派な武士になったという話を語った「やだけ箭竹」がある。「やだけ箭竹」でこう語られてい

る、「しかし良人の遺志をついで二十年、微塵もゆるがぬ一心をつらぬきとおした壮烈さは世に稀なものである、それは壮烈というべきだった」と。これも健気で気丈な女性の人生である。あるいは、自分や周りのことよりも王政復古の大業のためということを第一に考える、政治的な妻とも言うべき妻を描いた「尾花川」という短編もある。

さらに言えば、揺るぎない精神を持った女性だけでなく、山本周五郎は言わば実存的な苦悩を思う女性についても描いている。短編「風鈴」である。妻の弥生は精一杯健気に家事全般にわたって務めてきたが、こう語られている。「ああ、弥生はいま呻くように溜息をつく、こうして苦しい日を送り、苦しい日を迎えて自分の一生が終ってしまう。ほんとにこれでいいのだろうか、これで生き甲斐があるのだろうか、そう思っては暗い絶望的な気持ちにおそわれるのだった」と。「風鈴」は『日本婦道記』の中で例外的な短編である。気丈で健気で自らの人生の筋道に確固とした信念を持っている女性が登場す短編がほとんどの中にあって、こういう実存的なとも言える苦悩を洩らす女性が主人公の短編は、実に珍しいのである。山本周五郎は、そういう女性の悩みにも眼が届いていたわけで、これはやはり注意したいことである。

また、先に触れた、王政復古を第一義に考える女性を主人公にした、ということに眼を向けるならば、『山本周五郎

宿命と人間の絆^③』の山田宗睦の論に耳を傾けざるを得ない。山田氏は次のように述べている。まず、『日本婦道記』は、微妙なところで、時局的な作品とはちがっていた。たしかに、一見、時局的な風はあった」として、山本周五郎の、時局には「便乗する作品は書かなかった、という言葉にはいくらか正当化のひびきがないわけではない」と述べて、しかし「(略)たとえば山本莊八の「あ、神機遂に到る」とのあいだに、天地のへだたりがあることを、見おとしてはならぬ。そのちがいを前提にして、しかし、『日本婦道記』が、まったく時局とは無縁だったと一面的にいえることは、できない」としている。

山田宗睦は、その「無縁」だった作品の作者として堀辰雄を挙げ、やはり堀辰雄のように文字通りに無縁だった作者とは違うことを述べている。そして、その堀辰雄に対して、「山本周五郎は、時局とはりあわせの微妙なところで、しかし、時局便乗とはぎりぎりちがうものを、描いた」と。微妙とも言える戦時下の山本周五郎のあり方については山田氏のこの一文が公正な判断と言えるだろう。やはり「ぎりぎりちがう」からこそ、そのままを戦後においても刊行することができたのである。

このように戦前の小説を見てくると、戦後に展開される周五郎作品で語られる特質も、たとえば血縁よりも心と心の繋がりを重視するところなども、すでに出てきているこ

とがわかる。むろん、それはまだ萌芽の形であったりしているわけだが、次に戦後のそういう小説について見ていきたい。

二

『柳橋物語』は、山本周五郎一人の個人雑誌である「椿」創刊号（一九四六年七月）に発表され、一九四九年一月から三月までの「新青年」に再掲された小説である。これは、幸太と庄吉という二人の青年と、「おせん」という女性をめぐる物語である。庄吉が仕事の修行のため上方に行く直前に、「おせん」は庄吉から「待っていてくれ」と言われ、「おせん」も庄吉に好意を持っていたから、その言葉を受け容れたのである。幸太も「おせん」のことが好きだったから「おせん」に近づくのであったが、「おせん」は庄吉との約束があるので、もちろんそれを受け容れようとしていない。むしろ冷たく拒絶していた。そして上方の庄吉とは連絡が取れないまま、「おせん」は大火事に見舞われる。病身の祖父を庇って逃げ遅れた「おせん」であったが、その窮地を幸太が救ってくれたのである。しかし、幸太はその火事で死んでしまう。その後、一時は記憶喪失になった「おせん」であったが、火事で拾った赤ちゃんを自分の子どもとして育てようとする。赤ちゃんの名を幸太郎と名づける。やが

て「おせん」は、幸太の愛こそ本当の愛だったことに気づく。その子を幸太との子だと疑っていた庄吉は「おせん」に、もしもその赤ちゃんが本当に幸太の子でなかったのなら捨ててみる、と言う。「おせん」は一度はそうしようとしたが、やはりそうすることはできなかったのである。

そして、「おせん」はたしかに庄吉に好意を持っていたのだが、「けれどもそれは決して愛ではなかった」ことに気づくのである。約束したときは十七歳と若かったこと、仕事のことで庄吉に同情を持っていたことなどから、庄吉の申し出に頷いてしまったのだ、ということを目覚める。「おせん」は亡き幸太に向かつてこう語りかける。「(略) あなたにはお詫びのしようもないけれど、あれほど深く、幸太さんに愛して貰ったということ、それがこんなにはつきりよくわかったことがうれしいの、——あたしうれしいのよ、幸太さん、いま考えるとあの晩拾った子に幸太郎という名がついたのもふしぎではなかったのね、あの子はおせんと幸太さんの子だわ、あたし今から誰にでも云ってやってよ、おせんは幸太さんと夫婦だったって、この子は幸太さんとあたしの子だって、……怒らないわねえ、幸太さん」と。

真の愛に目覚めるというテーマは、同じく戦後の時期に発表された長編の『むかしも今も』〔講談雑誌〕、一九四九・六(八)の物語でも語られている。「おまき」は清次と結ばれ、一人の子をもうける。清次は腕の良い職人だった

が、博奕打ちのだらしない男でもあった。清次は金を持って江戸を出て行った。その後、残された妻の「おまき」は清次の兄弟子の直吉に支えられて子どもを育てながら生きていくのである。「おまき」はやがて失明するのだが、眼が見えなくなつて分かったことがあると、こう語る。「あたしのことを本当に心配し、あたしのために本気で泣いて呉れたのは、この世の中で直さんたったひとりよ、——眼が見えなくなつてから、初めてそれがわかったの、なんにも見えないまっ暗ななかで、じつと坐つて考えているうちに、だんだんとそれがはつきりしてきたわ(略)」と。

さらにこうも語っている、「むかしも今も、あたしとつては直さんひとりだった、これからもあたしには直さんだけだわ、……ねえ、そう云つてもいいわね、直さん」と。そして、「堰を切つたように」泣く「おまき」の肩を抱く直と「おまき」のことを、地の文でこう語られている。「二十幾年かの長いとしつきをまわつて、むかしの二人がいまめぐりあつたようだ」と語られている。題目の「むかしも今も」の言葉がここで出てきていて、二人の間は、実は本質的には「むかしも今も」変わらないことが語られているわけである。

戦前戦後の時期に限らず、山本周五郎は女性のあり方、生き方を描いてきた作家だったと言える。山本周五郎研究では第一人者と言つていい木村久邇典は『山本周五郎のヒ

ロインたち』で、「山本周五郎の小説を『女性文学』と規定する批評がある。決して的確をはずれた評言ではない」と述べている。たしかにそう言えるだろう。木村久邇典のこの著作自体が、周五郎文学における女性の登場人物について論じたものであり、そういう著作が出ていること自体、山本周五郎がいかに多くの女性たちを描いてきたかという証拠でもある。これから見ていく二、三の小説もそうである。一九四八年二月に労働文化社から刊行された『花筵』はお家騒動に関わって良人を亡くしたと思った「お市」が、機子となって力強く生きていく物語である。良人が死んだという不幸の直感が、却って「お市」に力と勇気呼び起こしたと語られ、「お市」もこう思うのである。「——強くなるう、良人はさむらいの本文を尽して死んだのだ、大垣藩のために少しも躊躇いもなく身を捧げたのだ、お市はそういう人の妻なのだ」と。

「お市」は機子になることにしたのだが、彼女にはその理由の一つに、「これまでにない柄模様の花筵を作るという望みがあった」とされている。その花筵は評判を呼んで仕事は成功したのだが、その間に我が子を水害で亡くすという不幸もあった。そして、死んだと思っていた良人が生きて帰ってきたのである。良人と再会したとき、初めて我が子を亡くしたことの悲しみが噴出するのである。「これまでは無意識のうちに思うことを避け、絶えずよそへ外らして

たのであるが、訴えるべき人に逢い、本当になしみを分かつことができるとわかつて、ほとんど堰を破る奔流のように慟哭が喉をひき裂いたのだ」と語られている。この「お市」の気持は了解できるだろう。気丈に精一杯堪えてきたのだが、押さえが取れたときに、一挙に悲しみの思いが噴出したのである。

この時期に書かれた、やはり女性が主人公の長編小説に『おたふく物語』がある。これは一九四九年四月から一九五一年三月までに複数の雑誌に断続的に掲載された小説で、「おしず」「おたか」という二人の姉妹が主人公で、二人とも幸せな結婚をする物語で、江戸期の庶民の生活ぶりもわかってくるような小説である。「おたふく」と言われているが、実は二人とも器量よしの姉妹であった。周りからは呑気な姉妹と思われていたようだが、必ずしもそうではなかったことが語られる。そして、何故か縁遠かったのである。しかしながら、二人とも良縁に恵まれるというハッピーエンドの物語であって、ほのぼのとした味わいがある小説となっている。木村久邇典は、全集第三巻の「附記」で、「敗戦後、山本周五郎は『柳橋物語』という江戸の『下町もの』の秀作をすでに発表していたが、山本が、このジャンルの小説に『確算』を得たのは『おたふく物語』においてであった」と述べている。物語は大きな事件もなく、淡々と進むのであるが、しかし読ませる物語となっていて、

たしかにこの作で自信が付いたのかも知れないと考えられる。

ほぼ同時期の『樂天旅日記』（『講談雜誌』、一九五一・一）

一一）は、一転して男性の視点から、現実政治に振り回される人間たちの愚かさやはかなさが語られた小説となつてゐる。七十万石の正嫡の順二郎は側室一派の陰謀によつて廃嫡にされ、幽閉同然の生活を送つていたが、彼が二四歳のときに、世継ぎとされていた側室の子が突然死んだため、事態は急変していく、という話である。やはり木村久邇典は全集第三巻の「附記」の中で、「（作者は）二十四歳になつても幼児のように無垢である白痴——ムイシユキン侯爵——そのような生れながら高貴なこの世ならぬ人間を描きたかつただろう」と述べているが、なるほど順二郎はドストエフスキーの長編小説『白痴』の主人公であるムイシユキンのな人物である。ということは、ムイシユキンのような聡明さも持つてゐるということでもある。たとえば、彼はこう語る、「——たとえおれの考え方が子供らしくとも、正しくないこと、間違つてゐることに平気ではいられない、それが世間の面白いところなどと云うことはできない」、と堂々と語る人物でもある。

ここではこの小説の内容に入っていくよりも、政治というものに対しての山本周五郎の姿勢が現れてゐると考えられるので、それについて見ていきたい。物語の終盤で、順

二郎の父で藩主でもあつた松阪出雲守伊親（これちか）は順二郎に向かつて、自分は無力な人間で、生きることさえ積極的なれないとして、こう語つてゐる、「（略）歴史を読み、世の変遷を思い、人間のすることを見て、父の最も強く観ずるのは徒勞ということだ」と。

そして出雲守伊親は順二郎に、かつて順二郎が幽閉の身であつた大吉田に帰ることを勧めて、次のように語る、「……大吉田に帰るがよい、出来ることなら市井に隠れて、自分の好むままに生きるがよい、眼前の事にとらわれるな、いま眼の前にある事は、やがてみな亡びてしまふ、愛も憎しみも、善も悪もいかなる事業も芸術も、……なにもかも亡びることから逃れることは出来ないのだ」と。大吉田に帰つた順二郎も大吉田の仲間たちにこう語る、「そうだ、父上の仰せのとおりだ、七十万石の領主になるよりは、このほうがずっと人間らしい、……これからはもつと素朴に、そして氣樂に生きることを学ぼう、さあ、みんな（さかすき）杯を取れ、おれの新しい門出だ」と。

政治に対するこの父子の姿勢、すなわち政治に関わろうとしない、あるいはそれに対しては距離を取つていようとする態度の底には、やはりニヒリズムがあると言えよう。もちろん、江戸時代の人間にニヒリズムという言葉は相応しくないが、先に引用した父の言う「徒勞」の思い、「やがてみな亡びる」という認識は、思想の言葉でいえばニヒリ

ズムと言うべきであろう。いくら政治に肩入れしても、結局は「世の変遷」を見るだけであつて、「徒勞」を再認識するだけではないかと言うわけである。それなら諦念を持つて、政治に関わらずに「素朴」に「氣樂」に生きるに超したことはない、ということになるうか。ここに山本周五郎の、政治に向き合うときの姿勢が語られている。

政治に対しての包括的な考え方ということで言えば、一九五一年六月一八日から同年九月三〇日まで「夕刊朝日新聞」に連載された『山彦乙女』に見ることができ。これは甲州の「かんば沢」の妖しい謎の虜になった叔父と、その甥である主人公の安部半之助の話である。といつても、叔父は物語が始まったときにはすでに失踪して行方不明になっているのである。ここでも、物語の内容を追うのではなく、半之助の語る政治論に眼を向けたい。

半之助はこう語っている、「政治と一般庶民とのつながりは、征服者と被征服者との関係から、離れることはできない。政治は必ず庶民を役とし、庶民から奪ひ、庶民に服従を強要する。いかなる時代の、いかなる国の、いかなる人物によつても、政治はつねにそういうものである」と。また、「消化器官と生殖器官、そして健康と才能。この四つの条件が均一平等にならなければ、強者と弱者、治者と被治者という対立は、永遠に続くだろう。博愛思想や、道義精神、人間的理性などでは、とうてい克服することはでき

ない」と。さらには、「いかに高潔な、無私公平な、新しい政治思想をもつていても、現実には、必ず強者であり支配者であることから、ぬけ出することはできないのである」と。

ここで語られている半之助の言説は、もちろん江戸時代の人間が語る内容ではない。この小説は一九五一年に書かれているのだが、その数年後にフルシチョフによつて行われたスターリン批判演説さえも先取りしているかのような言説にも見える。あるいは、理想主義的な社会変革思想の、その無残な成れの果てを語っているとも言えようか。さらに政治に対する半之助のベシミズムは、武田家の復興を願う集団に関しても、また幕府の柳沢一派に対しても、次のように述べるのである。「もしかして、武田氏の天下が実現したとして、それでいいかどうかというのか。柳沢一派にしても同様である。かれらの謀計がうまくゆき、甲府侯を廃し、かれらの好ましい將軍をたてて、その権勢を持続することができたとして、それでどれほどのことがあるというのか」と。

政治社会の動きに対してそのように思うとして、それでは、自分はどう生きていくのかという問題については、物語の終わり部分で語られている。「——現在ある状態のなかで、自分の望ましい生き方をし、そのなかに意義をみいだしてゆく、というほかに生き方はない」と。あるいは、

「――慥かなのは、自分がいま生きている、ということだ、

生きていて、ものを考えたり、悩んだり、苦しんだり、愛しあったりすることができるといふことだ」と思い、そして物語の最終部分では、「――おれは生きている。／半之助は心のなかで呟いた。／生きることができるといふことだ。／殆んど痛みのような、深い感動が、彼のなかで、ちからづよく、ひろがってきた」と語られている。

政治社会の問題はペシミスティックな認識が述べられていて、それを読むとどう考えても元氣が出て来そうにないが、しかし具体的な個人が人生に向かおうとするときのあり方について、その姿勢については、このように「生きていく」ということの有り難さや大切さを感じ取ることである。これは作者の山本周五郎の人生観でもあったであろう。安部半之助に託されてそれが語られているのである。

さて、このように見てくると、幾つかの小説から窺われる、政治社会観や人生観、さらには個々人が如何に生きるかという問題についての山本周五郎の考え方について、大凡のところが見えてきたのではないかと思われる。次に、それらの問題について戦後以後の小説からも見ていきたい。

三

血縁以外の人と人との繋がりを大切にしたいというテーマで、まず取り上げるべきは『五辨の椿』（『講談倶楽部』一九五九・一―九）であろう。この物語は、病のために死んでいく良人の死のときにも、その臨終が間近であることが分かっているにもかかわらず、浮気相手の男と箱根旅行に出かけるような妻、すなわち主人公の「おしの」からすれば母親「おその」と、その愛人たちであった男たち五人を、娘の「おしの」が殺す一種の復讐譚である。簪のひと突きで殺された男たちの死体の側には、いずれの場合にも椿の花びらがあつた。「おその」の良人である喜兵衛は、娘の「おしの」の父親であつたのだが、その父は「おしの」が麻疹や疱瘡のときはもちろん、風邪をひいたくらいときでも、父は「おしの」の側を離れずに看病してくれる優しい父であつた。他方の母親は、そういう親身な看病は全くしてくれなかつたのである。

その母親から「おしの」は決定的なことを聞かされる。それは、「おしの」の父親は実は喜兵衛ではなく、他の男だといふのである。それも喜兵衛の病死のほぼすぐ後に、喜兵衛は「おしの」の真の父親ではないから悲しむことはないと平然と言ひ放つたのである。そのとき、「おしの」は母と男たちに対してはつきりとした殺意を抱くのである。良人

の臨終の夜にも他の男を引き込んで酔いしれている母。そして、こう語られている。「父の死骸を見たとき、母は悲しそうな顔ひとつせず、「きみが悪い」と云つて逃げ出し、子供役者の菊太郎と、良人の死骸のある同じ家の中で、酒を飲み、たわむれていた」と。「——これが許せることでしようか。」と思つた「おしの」は、母と浮気相手の菊太郎を焼き殺すことにするのである。そして、自分も焼き死んだという偽装をして、自分の存在を消した後、復讐に向かうのだ。美しい娘であつた「おしの」はその美貌を武器に男たちに近づき、男たちを誘惑して彼らが油断しているときに簪でひと突きして殺すのである。母と関係のあつた男は八人以上いたが、許せないと思つたのは五人の男であつた。その男たちを殺した後に椿の花びらを残したのは、父の喜兵衛が椿の花が好きだつたからであつた。すべての計画が終わつたとき、「おしの」は自らの命を絶つのである。注意したいのは、父親の喜兵衛が「おしの」が自分の子どもではないことを知つていたらしいのである。地の文でこう語られている。「——死ぬまでにいちど会いたい、ひと言だけ云つてやりたいことがある。／そう云つたときの父の声や、見るに忍びないほど苦しげな表情は、いまでもはっきりと記憶に残っている」と。父の喜兵衛は「おしの」が自分の子どもでないことを知つていて、それを「おしの」に伝えようとしていたらしいのである。となると、

「おしの」は育ての父である喜兵衛を心から慕い、そのため犯罪まで犯し、他方の喜兵衛は「おしの」を実の娘のように可愛がつたわけで、これは血縁を超えた繋がりのある話であると言えよう。「おしの」は、彼女に捜査上の目を留めていた同心の青木千之助に宛てた手紙の中で、「いま一言だけ申し上げます、それは……この世には御定法では罰することのできない罪がある、ということでございます」と述べている。「おしの」は、「御定法」にできないことを、すなわち母と浮気相手の男たちの非道に懲罰を与えるということを、自らが行つたわけである。

このように『五辨の椿』は、血縁よりも濃い人と人との繋がり物語と読むことができよう。親子関係ではない、そういう繋がり物語が『さぶ』（『週刊朝日』、一九六三・一・同・七）である。これは男と男との友情の話で、江戸の表具・経具の名店に勤める二人の少年、やがて青年になる、「さぶ」と栄二の話である。栄二は目端が利き見た目も良く仕事のできる青年であつたが、「さぶ」は万事に不器用だが心根の優しい青年として登場する。二人は仲が良く、互いに支えながら日々を送つていたが、「栄二」が窃盗の濡れ衣で捕まり、石川島の「人足寄場」に送られることになる。栄二が「人足寄場」に送られても、「さぶ」は栄二に差し入れをしたりして、健気に栄二の面倒を見るのである。

「さぶ」は栄二に語っている、「おらあ栄ちゃんが頼りな

んだ。側に栄ちゃんがいてくれれば、どうやら自分なりの仕事もできるし、自分にも仕事ができるんだって、っていう気持ちになれるんだが、おれ一人つきりだと心ぼそくって頼りなくって、ついへまなことがかりやちまうんだ」と。しかし、栄二は栄二で「人足寄場」から出た後「さぶ」に向かつて、「略」ただ、——いまのおれにとつては、おめえが側にいてくれるというだけが大きな頼みだ、これだけは忘れないでくれな、さぶ」と語るのである。

このように、才能もあり意志も強い栄二が、自分が「さぶ」に代表される他者に支えられ、他者との繋がりで生きているのだと自覚したところに、意味があるだろう。栄二は寄場にいるときに与平に言われた言葉を思い出しながら、次のように思う。すなわち、「おまえさんは一人ぼっちじゃあない、少なくともさぶちゃんやおすえさん、おのぶさんという人がいるじゃないか、どんな場合にも、人間は一人ぼっちということはないんだよ、というような意味のことだ。それにしても、世間たてられ、うやまわれていく者には、蔭にさぶのような人間が付いている、というおのぶの言葉は痛かった」と。

物語は終盤で、栄二の冤罪の真相が明らかにされる展開になっていて、一種のどんでん返しがあつて興味深い話となっているのだが、ただこの小説だけではないが、山本周五郎の小説には時折首を傾げなくなる叙述があるのである。

たとえば『さぶ』では、冤罪事件が起こつて栄二が表具・経具屋の芳古堂を首になった後、栄二は「さぶ」に向かつてこう語っているのである。「芳古屋と縁が切れた以上、（略）親方も店内の誰にも、おれをどうしろこうしろと云う権利はもなくなった、そうだろう、さぶ」と。ここで、栄二は「権利」という言葉を使っているが、むろんこの時代、そういう言葉は無かつたし、その観念も無かつたのである。これは、名作にもある瑕瑾と言うべきであろうか。

また、『さぶ』で注意されるのは、多くの山本周五郎の市井ものでは、庶民は政治権力と無縁に暮らしていて、政治権力というものを意識する庶民は出てこないのであるが、『さぶ』はそういう周五郎の市井ものとは異なっているのである。これについては丸川浩が「山本周五郎における貧困・庶民・反権力」で次のように述べている。すなわち、「しかし、『さぶ』では、栄二は、無実の罪に陥れられ、人足寄場の人々の境遇に憤りを覚えることによって、権力の存在に気づかされるのである」として、この小説は「栄二の視点をとおして、権力の非情さを描いてい」て、「それが『さぶ』を、それまでの市井ものと異質な小説にした」と述べている。

こう見てくると、『さぶ』は親子関係の話ではないが、血縁のない者同士において、心と心との繋がりがいかに大切

であるかということ語った物語と言えよう。そのような繋がりの中で人は生きていくとしても、それでは個々人は自らの人生にどう向き合えば良いのかという問題は残るであろう。それを語っているのが、やはり名作とされていて映画化もされた『赤ひげ診療譚』（オール讀物、一九五八・三・一二）である。『赤ひげ診療譚』はすでに指摘のするように、^⑧「赤ひげ」こと新出去定という小石川の診療所の医師であり責任者である中年男性と、その元で医療活動を行っている、長崎帰りの青年医師の保本登^{やすもと のぼる}の二人が主人公と言えるが、養生所を訪れる患者たちも主人公と言える。彼らの人生の話が、『赤ひげ診療譚』の物語を構成していると言えるからである。ここでも、その物語を追うのではなく、「赤ひげ」の語る言葉に注目したい。

新出去定は保本登にこう語っている。ただ、会話の中でなく地の文において、去定が語った言葉とされている。すなわち、「人間のすることにはいろいろな面がある。暇に見えて効果のある仕事もあり、徒労のようにみえながら、それを持続し積み重ねることによって効果のあらわれる仕事もある。おれの考えること、して来たことは徒労かも知れないが、おれは自分の一生を徒労にうちこんでもいいと信じている。そこまで云ってきて、急に去定は乱暴に首を振った」と。そして、「おれはなにを云おうとしているんだ、ばかばかしい」と言うのである。「乱暴に首を振」り、

「ばかばかしい」と言うのは、深刻な人生論など語るのは自分には似合わないと思っているためであろう。したがって照れ隠しでもあったと言える。そうではあるが、ここに人生に対する新出去定の、そして作者山本周五郎の本音が語られていると言えるのではないだろうか。

山本周五郎は、戦後以後の長編小説において、政治社会に向かう姿勢とともにその中で如何に生きるべきかという問題について、真摯に語ろうとしていたと言える。その結果、読む面白みを持っている時代小説の範疇から超えていくところ、あるいは逸れていくところがあったのではないかと思われる。その問題に関して、「大衆文学研究」第二十号（編集人尾崎秀樹）の「座談会 山本周五郎の人と作品」^⑨の中で、山本周五郎は、権威に対して抵抗していくこと、レジスタンスがあつたのでは、という話題に移っていったときに、奥野健男はこう語っている。「たしかにレジスタンスはしていたと思うんです。だけれど最後の「樫ノ木」はいいんですけれども、「虚空遍歴」から「ながい坂」あそこらじゃあんまり自分で純文学というのか、小説ということを考えすぎて、純文学作家になりすぎたというような気がするんですがね」と。それについて尾崎秀樹が「説教が多すぎた」と受け、それに対して再び奥野健男が「多すぎたということもあるし、自分で小説中毒になったといわれるようなところがあるように思っんです」と語っている。

たしかに、そういう傾向があったとも言えるが、ここではその長編小説の中から、『天地静大』（北海道新聞）他、一九五九・一二―一九六〇・九）と『虚空遍歴』（小説新潮）一九六一・三―一九六三・二）を取り上げたい。これらの小説には、社会や人生に対しての山本周五郎の姿勢、態度がよく表れていると思われるからである。

『天地静大』は、幕末期東北の小藩、中邑藩の青年たちが主人公の物語で、時代に流される人々と、その中であつて自分の学問の道を守ろうとする青年の杉浦透と、藩主の弟でありながら、藩の政治とはかけ離れた境遇にいる水谷郷臣が主な登場人物である。他に脱藩して攘夷を決行しようとする青年の安方伝八郎、郷臣の想い人であつた女性「すみ」や、透と郷臣をめぐる女性の「なほ」、透を慕う女性の「ふく」などが登場し、激動する時代の中で信じる道を歩もうとする青年群像が描かれている。ここでも物語の内容を追うのではなく、政治社会に対する作者の考え方が恐らく託されているであろうと思われる郷臣と透の考え方について見ていきたい。

郷臣は「さくら花」をめぐる或る想念を批判して、「散り際をいさぎよくせよ、さくら花の如く咲き、さくら花のようにいさぎよく散れ——いやな考えかただな」と思う。ここには、戦時下を体験した山本周五郎の考え方が出ていると言えよう。さくら花のように「こんなふうであつてはな

らない」と言う郷臣は、続けてこうも語っている。「もつと人間らしく、生きることを大事にし、栄華や名声とはかわりなく、三十年、五十年をかけて、こつこつと金石を彫るような、地味な努力をするようにならないものか（略）」と。また、郷臣は透に向かってこう語っている。「生きることはむずかしい」と言つた後、続けて、「人間がいちど自分の目的を持ったら、貧窮にも屈辱にも、どんな強い迫害にも負けず、生きられる限り生きてその目的をなしとげることだ、それが人間のもつとも人間らしい生きかただ。ひじょうに困難なことだろうがね」と。

郷臣はまた、「人間の生きている、ということが「善」であるし、その為すこともすべて「善」なのだ」として、次のように語る。「なにをするかは問題ではない、人間が本心からすることは、善悪の約束に反しているようにみえることでも、結局は善をあらわすことになる」、「この世に起こること、人間のすることはすべて善い、愛したり憎んだり、斬ったり斬られたりしながら、それらすべての経験によって、人間全体が成長してゆくのだ、——」と。

このような郷臣の言葉から、彼が人間性と人生を肯定する立場から物事を見ようとしていること、生きていることにこそ価値を見出そうとしていること、したがって彼は言わば明るい向目的な考え方をしている人物だと言えるだろう。そういう彼が自刃したのは、状況がやむを得ず、それ

を強いたからだと判断できる。彼はできれば生きて成長したかったと言える。おそらく、山本周五郎は郷臣の考え方を文句なく支持していると考えられる。

他方、政治社会の動きに対しての姿勢、態度ということに関しては、杉浦透の考え方が山本周五郎を代弁しているのではないかと考えられる。透は政治について、「政治だけが大切なのではなく、米を作り魚を獲り布を織ることも欠かせないし、学問はさらに大切な、ゆるがせならぬものだと信じます、特にこういう学問」と述べている。ここでの「こういう学問」とは物理学のことを指しているが、たしかに透の言うように、「政治だけ」が大切なのではない。とかく政治的な動乱期には政治至上主義がまかり通るのだが、透のような冷静なものの考え方が必要であろう。

また、いわゆる政治的人間に対しての透の観察にも頷けるものがあると言える。彼は勤皇派も佐幕派にも同様なものを見ていて、こう述べている、「——かれらはみんな同じような調子でものを云うな。／勤王を唱える者たちもそうだ、と透は思った。どちらも自分の信じていることが唯一の大義であり、反対する者は国家の賊であり、人間ではないようなことを云う。その口ぶりも、すぐに激昂し、たちまち色をなして生かすとか殺すとかいう、極端な評言をもちいるところもよく似ていた」と。さらに「——これも不安だな。／伝統を守り抜くということも不安だし、世の中

を変革しようとすることも不安なんだな。どちらも、それが動かしがたい真実なら、そんなに嘔号^{どこう}したり、人を威す^{おど}ような態度はとらない筈である」と。

たしかに政治的な人間にありがちな側面をよく見ていると言える。このような政治的人間が我が物顔でいる世界が政治の世界ならば、そういう世界とは関わりたくないと思うのも理解できるだろう。おそらく山本周五郎は、戦前では右翼にそのような人間たちを見て、戦後は今度は左翼の側にそのような人間を見てきたのであろう。そういう見聞を、幕末期の佐幕派と勤皇派に当てはめたとも考えられる。さらに佐幕派が郷臣を斬ろうとしたことに關して、「斬られなければならぬようなことを郷臣がなにかしたのか」と憤り、続けて次のような思いを持つ。「——狂ってるんだな。／自分たちの不安と恐怖心に駆りたてられて、眼が昏^{くら}み、頭が狂ってしまったのだ。幕府政体を護る、と絶叫するのは、自分の生活を守るということにすぎない」と杉浦透は思っているのである。

おそらく、透のこういう見解は、一面において鋭く核心を突いていると考えられる。ただ、そういう面だけで政治的な事柄を判断するのも偏頗と言えるだろう。興味深いのは、透が政治的な事柄について批判的な自分のあり方に対して、反省するところがあることである。透はこう思っている、「——たとえかれらのすることや云うことが狂信者

のようであつても、その根本は「現実」と密接につながっている。自分たちはどうだ」として、「学問に専念すること」が、もっとも正しい道だと信じている」が、「(略)同時に、それが現実から逃げていふことにならないか、という不安を感じずにはいられない」と。透は政治的人間に対する批判においては賢明で、且つ自己への懷疑と批判では誠実であると言えよう。

政治や政治的人間に対しては批判的であり、そういう批判を語る自分自身に対しては懷疑的でもある透は、では具体的に透はどうすべきかという問題では、まずは妥当なところに着く考え方をしている、これは作者の山本周五郎もそうであつたと言えようか。物語の末尾部分でこう語られている。「――おれは自分の学問を守りぬいてゆくぞ。／たとえ世の中がどう變ろうとも、自分は自分の道を進んでゆけばいい。あの山があのように在る如く、この川の水が流れやまのように、と彼は思つた」と。

さて、このように『天地静大』の物語を見てくると、この小説は政治社会をどう考えるか、またそれに対して自分はどういう態度を取るかという問題についての、山本周五郎の見解が包括的に語られた小説であつたと言えよう。その意味で興味深い小説である。もちろん、この小説はまだいわゆる大衆文学的、あるいは時代小説的な読みどころのある小説であつたと言えるが、次に扱う『虚空遍歴』は、

一種の芸術家小説と言うことができ、先に引用した座談会で奥野健男が述べているように、たしかに「小説中毒になつて」いるような読後感も出てくるのである。つまり、ほとんど大衆文学の一ジャンルとしての時代小説の範疇からはみ出た小説と言えるかも知れない。

『虚空遍歴』は、浄瑠璃作者である中藤冲也がこれまでに無い新たな浄瑠璃を作ろうとする、その苦闘の生涯を描いた物語である。新たな浄瑠璃は結局完成することなく、病に倒れた冲也は死んでしまうのであるが、しかし、その失敗に終わったと見える苦闘の生涯にこそ、冲也の生涯の意味も意義もあるのではないだろうか、と問い掛けている小説だ言えるのではないかと考えられる。山本周五郎はイギリスの詩人のブラウニングの言葉を座右の銘としていたようだが、その言葉とは、「人間の真価は、その人が死んだとき、なにを為したかで決まるのではなく、彼が生きていたとき、なにを為そうとしたか――である」というものである。冲也は結局、新しい浄瑠璃を作成することはできなかったが、しかしそのために苦難の道を懸命に歩んだことに、冲也の「真価」はあつたと言えるだろう。

このように読める『虚空遍歴』については、奥野健男が「虚空遍歴」で次のようにまとめている。奥野氏は、山本周五郎は冲也をいじめ過ぎていたのではとさえ思う、ということを書いた後、「だが苛酷な運命に冲也を追いやることに

よって、作者は真の芸術家の生き方とは何であるか、人間の真実の価値とは何であるかということを追求め、沖也の中にそれを見出し表現しようとする。沖也こそ真の芸術家であり、ほんとの人間なのだということを、文学の力によって描き出そうとしているのだ」と語っている。それとともに『虚空遍歴』の沖也には、竹添敦子が『山本周五郎庶民の空間』で、「だが、死を消滅ではなく完成だとする沖也の主張に周五郎の死生観の到達点が示されている」と述べている。たしかにそう言えるだろう。もともと竹添氏は、それは「庶民の姿を描くだけでは、そうした結論など導きようがないだろう」とも述べていて、山本周五郎が自身の死生観を託すのに、浄瑠璃作者の中藤沖也を、すなわち芸術家を主人公とする小説を書いたのだとしている。

周五郎の死生観としても一つ挙げられるのは、その孤独の認識であろうが、これについても沖也は語っている。金沢へ向かう旅の途中で知り合った絵師で、やがて自殺してしまった禱石に、「気の合ったどうしが饒舌つたち、笑ったりしていても、じつは自分一人で饒舌つたり笑ったりしているだけだ、死んでしまったいまはそれがわかるだろう、なあ禱石、そうだろう」と語りかけているのである。やはり金沢に向かう道中で知り合った老人の言葉も、この小説に込められている作者の思いを代弁していると考えられる。何処へ行くのかと老人にたずねられ、沖也が金沢に行く

のだと応えると、老人は「そこが終りではあるまい」と言い、「沖也の顔をじつとみつめ」て、こう語るのである。「——そのものにはおちつく場所はない、そのものに限らず、人間の一生はみなそうだ、ここにいると思ってもじつはそこにはいない、みんな自分のおちつく場所を捜しながら、一生遍歴してまわるだけだ」と。この老人の言葉には「遍歴」の言葉も出ていて、この小説のテーマが語られていると言える。その遍歴の空間は、「おちつく場所はない」というのだから、なるほど「虚空」と言うべきでもあろう。

それでは新しい浄瑠璃の創造を目指している中藤沖也の才質は、本当のところどうだったのかについては、彼の親友である生田半二郎の言葉が肯綮に中っているだろう。生田は舞台での沖也の浄瑠璃が失敗したことについて、おけい「芝居がこの土地の水と合わなかったためでもないんですか」と言うと、生田は「そしてまた中藤沖也の才能が時代をぬきんでいるためでもありません」と述べ、続けて「——あれは彼の才能がそれほど高いものでもなく、むしろかたよって一般性がない、という正体をみせたものだと云うべきでしょう、ええ、——ずいぶん乱暴な酷評のように聞こえるかもしれないが、私の云うことは誤りはないと思います」と。

親友だったからこそ、そのように見抜けたとも言えるが、この生田の評価はおそらく正しいであろう。何故なら、新

しい浄瑠璃の創造を行うべく、冲也はまさに刻苦勉勵するのであるが、あれだけ辛苦を重ねても、それが遂にできなかったというのは、やはり才能の限界と言うべきであろう。その点でこの小説は悲劇的な話なのであるが、しかしながらそのように懸命に生きたというところに、先ほども述べたように、中藤冲也の真価があったと言えるのである。山本周五郎は、そういう冲也を大いに評価しているのである。そして、私たち芸術家でない人間に対しても、事の成否よりも目的に向かって歩き続ける人生こそ、価値ある人生なのだ、と山本周五郎はこの小説を通して語っていると思われる。

さて、このように見てくると、人生観を中心とした山本周五郎のものの考え方が大凡のところ分かったのではないかと思われる。その文学は、やはり現代人の私たちの人生にも励ましを与えるものであり、彼が自分の小説は一応は時代小説であると言われるものであるが、実は本質的には現代小説だと考えていたことも了解できるだろう。山本周五郎は意外に早世だったのであり、それは悔やまれることである。なお、山本周五郎には通説を覆そうとした『正雪記』や『樅ノ木は残った』という大作があり、極めて興味深い小説となっているが、それらは時代小説というよりも歴史小説と言うべきなので、この論考では論及しなかった。

〔注〕

- (1) 『山本周五郎全集』全30巻（新潮社、一九八一・九―一九八四・三二）。山本周五郎の文章からの引用は、すべてこの全集に拠る。
- (2) 奥野健男『山本周五郎』（創樹社、一九七七・八）。
- (3) 山田宗睦『山本周五郎 宿命と人間の絆』（芸術生活社、一九七四・一二）。
- (4) 木村久邇典『山本周五郎のヒロインたち』（文化出版局、一九七九・九）。
- (5) 木村久邇典「附記」（『山本周五郎全集』第三巻（新潮社、一九八二・一））。
- (6) 注（5）参照。
- (7) 丸川浩「山本周五郎における貧困・庶民・反権力」（『経済・労働・格差 文学に見る』（冬至書房、二〇〇八・三）所収）。
- (8) 山田宗睦『山本周五郎 宿命と人間の絆』における指摘である。注（3）参照。
- (9) 「大衆文学研究」第二十号（南北社、一九六七・九）所収の座談会。
- (10) 注（2）参照。
- (11) 竹添敦子『山本周五郎 庶民の空間』（双文社出版、一九九七・三）

（ノートルダム清心女子大学名誉教授）